

# 瑞巖寺境内遺跡

瑞巖寺埋蔵文化財発掘調査現地説明会資料



平成 23 年 10 月 1 日 (土)  
・ 10 月 2 日 (日)

松島町教育委員会

## 1. はじめに

瑞巖寺境内遺跡は、臨済宗瑞巖寺を中心とした古代から近世の遺跡です。創建400年を迎えた瑞巖寺は、長年の腐朽や沈下に加え、近年の度重なる地震により建物が著しく傷んだことから、大がかりな修理が必要になりました。「平成の大修理」は本堂ほか7棟の建造物を対象とし、2008年11月から約9年の歳月をかけて行っています。このうち本堂は50cm掘り下げてコンクリート製の基礎を入れるため、5月16日～10月31日の予定で発掘調査を実施しています。

## 2. 周辺の歴史

### －奈良・平安時代－

奈良・平安時代の多賀城とその周辺は、陸奥国を治める役所・軍事施設と都市が営まれました。陸奥国最大の消費地に隣接する松島湾は、交通路としてだけでなく、塩と海産物の供給地としても重要な役割を果たしていました。松島湾沿岸の製塩遺跡は140ヶ所以上で確認され、古代奥羽随一の塩生産地となっています。本遺跡でも宝物館の調査で、平安時代の製塩炉が3基発見されました。なお、『天台記』には、天長5年（828）に慈覚大師円仁が青龍山延福寺を創建したと記されていますが、位置は確定していません。

### －鎌倉・室町・江戸時代－

建長年間（1249～1256）に臨済宗青龍山円福禅寺が建立されました。円福寺は関東御祈祷所に指定されたのち、五山・十刹に次ぐ諸山に数えられ、奥羽有数の禅寺として鎌倉・室町両幕府から厚い庇護を受けました。その後、戦国時代を経て衰退しますが、江戸時代に入って、伊達政宗が慶長9年から14年（1604～09）までの期間をかけて円福寺を復興し、寺の名を「松島青龍山瑞巖円福禅寺」に改めました。今に伝わる桃山様式の本堂などの国宝建築はこの時のものです。

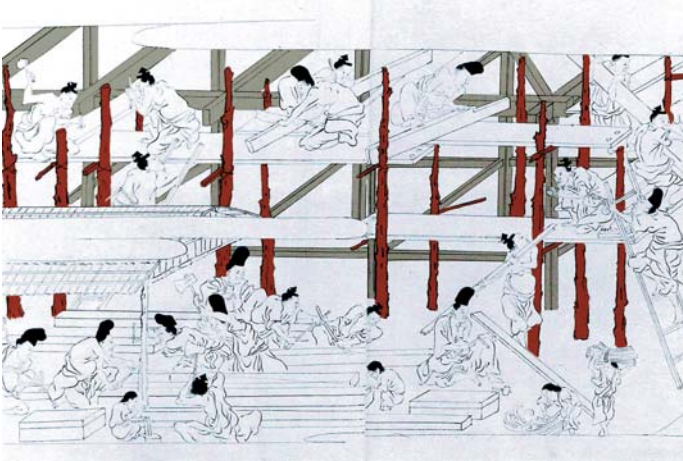
鎌倉・室町時代の遺構は、瑞巖寺本堂や宝物館の周辺、円通院前、雄島で発見されています。本堂周辺では切石列や石積遺構などが確認され、宝物館周辺では13世紀後半以降、堀や建物・池・井戸などの施設が継続的に設けられており、国産や輸入陶磁器・漆器・瓦などが出土しました。また、円通院前の石窟は13～14世紀頃まで遡り、雄島では多数の板碑とともに納骨跡が確認され、板碑の造立は13世紀後半から14世紀代、骨蔵器による納骨は12世紀後半から14世紀後半に行われたことがわかりました。こうした成果から、中世奥羽屈指の禅寺円福寺とともに、霊場松島の様子が具体的に明らかとなりつつあります。



瑞巖寺本堂



玄関北側で検出された石積遺構



### 江戸時代の建築現場の様子

茶色が足場を組んだ柱、  
灰色が建物の柱  
おちくぼ物語絵『古画類聚』より

### 【軒下の石敷<sup>いしじき</sup>】

本堂の軒下には切石が敷かれていたことがわかりました。石敷は南側（6号石敷）・西側（7号石敷）・北側（8号石敷）で確認され、東側では明治時代に敷かれた四半敷（正方形の石を縁に対して45度になるように斜めに敷いたもの）を造ったときに壊されたのか、痕跡を確認できませんでした。6号石敷は東西に約27m、幅は最大1m、7号石敷は南北に37m、最大幅1m、8号石敷は東西17.8m、最大幅0.9mの範囲で確認できました。7号石敷は切石の下に瓦を敷くなど、6・8号石敷とは構造が異なっていました。瓦の中には「太田市兵衛<sup>おおたいちべえ</sup>」の刻印（スタンプ）が押されているものがあり、慶安（1648～51年）の頃に葺き替えられたものと考えられています。7号石敷より、6・8号石敷の方が古く、創建当初に遡る可能性が高いと考えられます。



7号石敷の断面状況

### 一円福寺一

基壇<sup>きだん</sup>を伴う礎石<sup>そせき</sup>建物跡1棟と、溝跡2条、土留めの石列跡1条などを発見しました。

【1号建物跡】基壇の上に建てられた南北2間、東西5間とみられる礎石建物跡で、礎石は基壇の端に据えられています。建物の方向は、南北が瑞巖寺本堂より西へ傾いています。基壇とは、建物部分を周辺より高くした土壇のことで、建物を立派に見せたり、湿気防止や礎石の地盤を安定させる役割を果たしました。基壇は南北4.8m（推定）、東西13.1m以上、高さが20cmあります。その上には、45cm四方で厚さ15cmほどの凝灰岩製切石が建物の方向に対して45°に傾けて敷かれました。これは、禅宗寺院に特徴的な四半敷<sup>しはんじき</sup>と呼ばれる基壇舗装<sup>きだんほそう</sup>です。



四半敷



下層から検出された礎石(東から)



礎石の坪地業に埋め込まれた板碑①



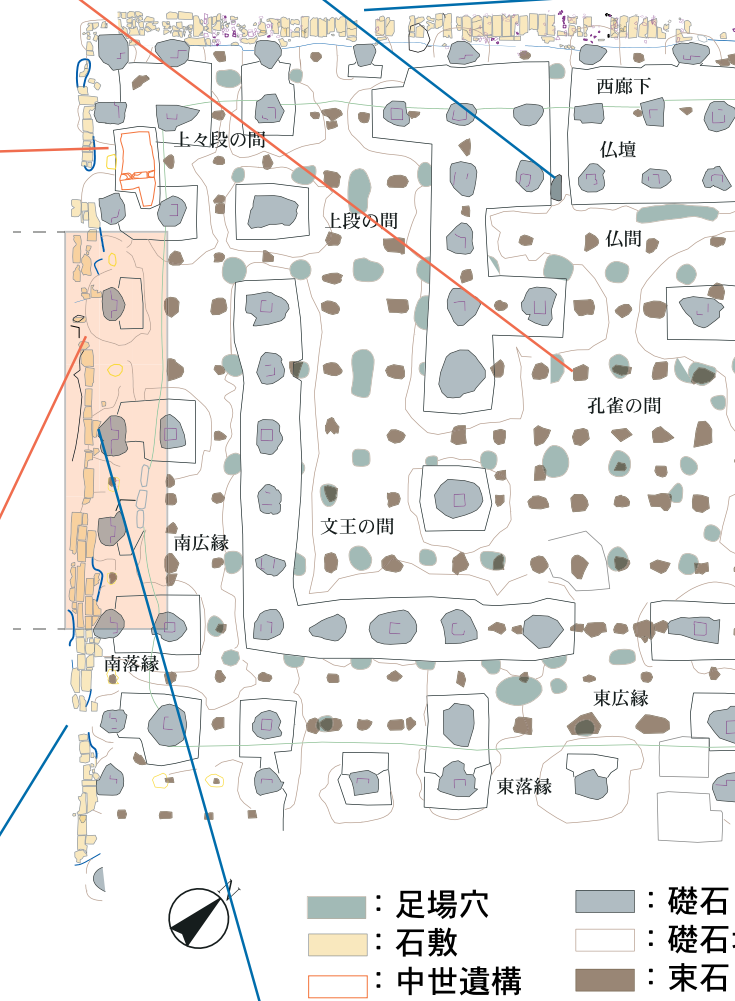
2号溝跡・4号石列跡(西から)



1号建物跡(西から)



6号石敷(東から)



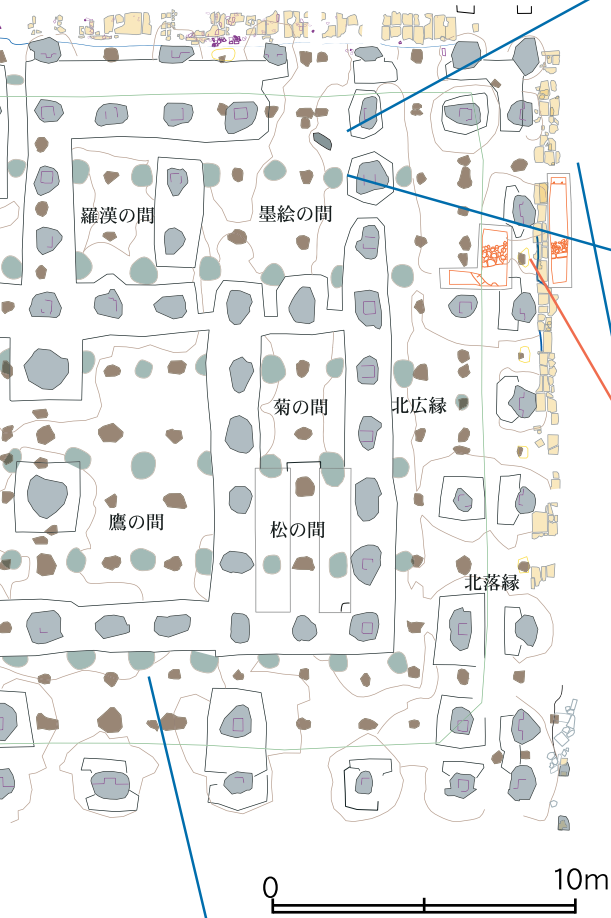
柱座 (ちゅうざ)



7号石敷(北から)



礎石の坪地業に埋め込まれた板碑②



坪地業

写真の背景が青いものは瑞巖寺関連の遺構  
赤いものは中世円福寺関連の遺構



東石の根石に転用された五輪塔の風輪



5号石列跡(南から)



東広縁で検出された足場穴(北東から)



8号石敷(東から)

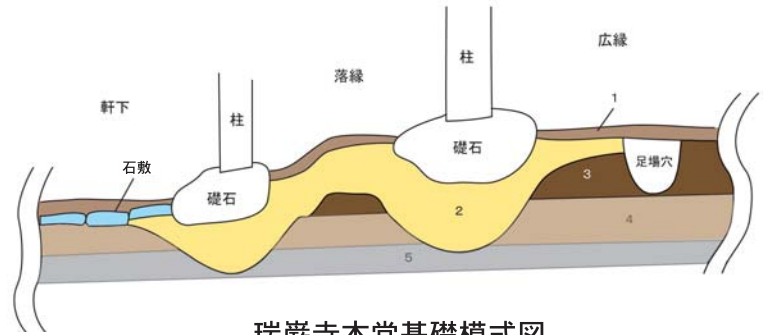
### 3. 発見遺構

今回の調査では瑞巖寺本堂に伴う施設と、それより古い中世円福寺に関わる施設跡を発見しました。

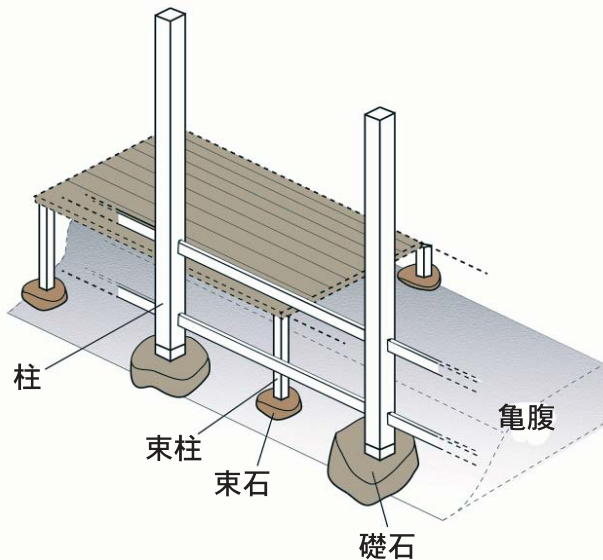
#### —瑞巖寺—

##### 【瑞巖寺本堂の基礎】

本堂の基礎は右の模式図のようになっていることが分かりました。本堂周辺は奥まった谷状の地形となっており、山際となる北・南・西の三方は硬い岩盤がんぼんですが、中央部分の地下は湿気を含んだ土が厚く堆積しています。



瑞巖寺本堂基礎模式図



本堂を建てる前に、まず岩盤を一部削り出し、中世の遺構を埋めるとともに地盤の弱いところには土を入れて基礎的な整地を行って、平坦な面を作り出します（上図4層）。その上に亀の腹のように盛り上がった基壇きだん（建物部分を周囲より高くした土壇）を構築します（上図3層）。亀腹上の高まりは東西24m、南北38mの規模を持っています。その後、礎石を据えるための穴すかた（据え方）を掘り（上図2層）、大きな礫れきを混ぜながらつき固めます。このとき、いたびいたびやごりんとうごりんとうといった中世の信仰に関わる石塔もその材料として使われていました。礎石の据え方は大きいもので深さ1m、上面の径は4mほどあります。山側になると地盤が安定しているため、浅い据え方になっています。

塔もその材料として使われていました。礎石の据え方は大きいもので深さ1m、上面の径は4mほどあります。山側になると地盤が安定しているため、浅い据え方になっています。

##### 【本堂建築時の足場】

本堂内部からは建築の際に足場あしばを組んだ穴が見つかりました。足場穴は全部で90個ほど見つかり、広縁より内側に総柱状そうばしら（一間ごとにくまなく格子状に柱を立てること）に立てられていたことが分かります。直径は50cmほどのものが多いですが、柱を抜いたときに穴を広げたためか、楕円形になっているものもみられます。



文王の間で検出された足場穴

【礎石】孔雀の間南側の足場穴の下で検出した礎石です。1号建物跡の北13.7mにあり、瑞巖寺本堂の基礎整地より古いことから円福寺期の建物の礎石と考えられます。大きさは東西70cm以上、南北100cmあり、本堂の礎石とさほど変わらないことから、<sup>ぶつでん</sup>仏殿や<sup>はつどう</sup>法堂といった大型建物の一部とみられます。

【4号石列跡】本堂南西部で確認した南北方向の石列跡で、3.0m以上延びています。1号建物跡の基壇から西に1.9m離れて平行しており、幅20～30cm、長さ40cm、高さ15cm前後の凝灰岩切石を東側の面を揃えて並べています。そのうちの1個は一辺が51cmと大きさが明らかに異なること、5号石列跡とは構造が異なることから、塀跡など他の施設跡の可能性を含めて検討中です。

【5号石列跡】本堂北西部で確認した南北方向の石列跡で、3.6m以上延びています。南北の方向は1号建物跡や4号石列跡と同じです。幅15cm、長さ25cm、高さ15cm前後の凝灰岩切石を東の面を揃えて並べ、その裏には小振りの石が詰められました。石列を挟んだ西奥が20cmほど高いことから、一段高い西側平坦面の土留め施設と考えられます。

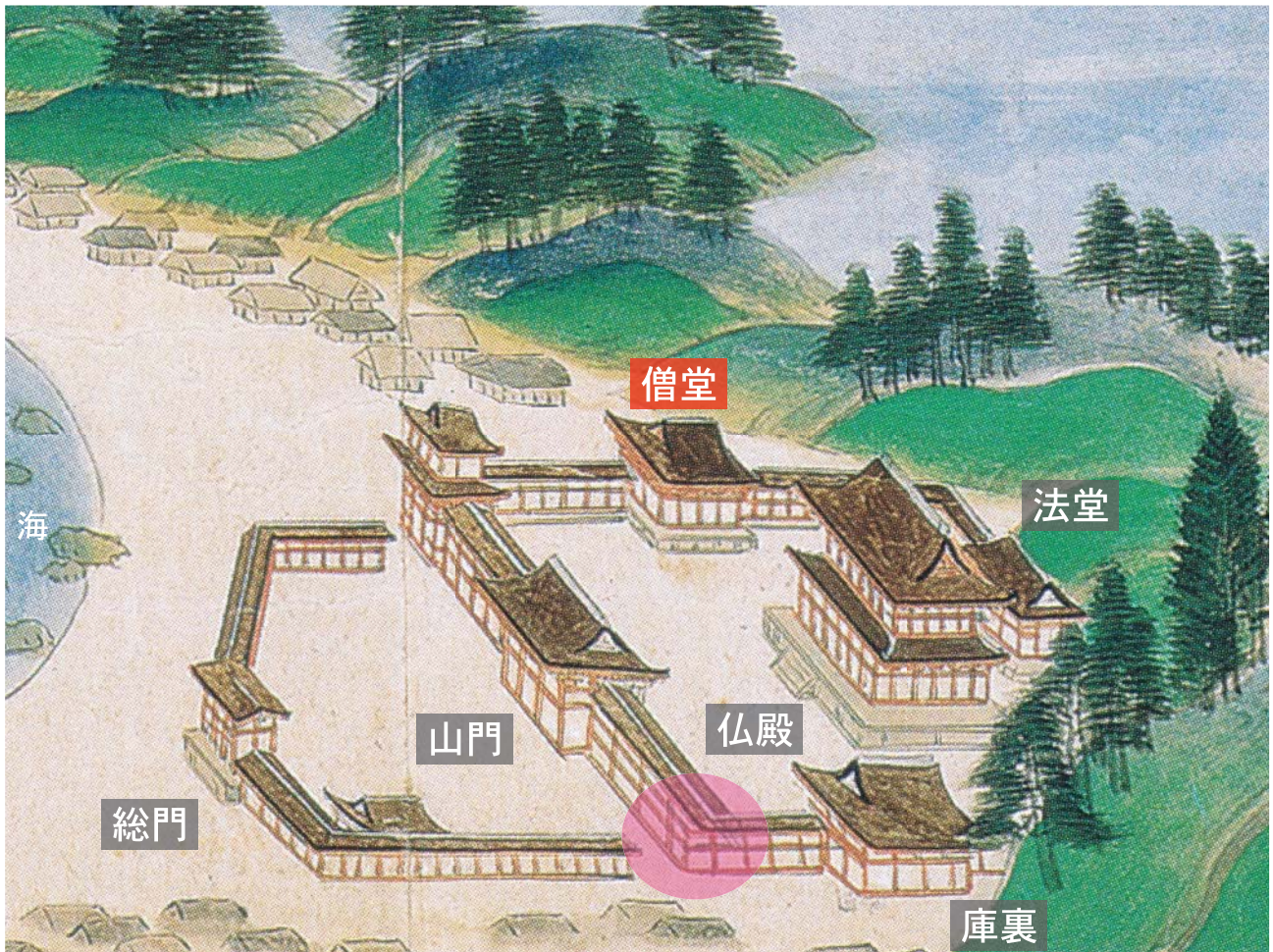
#### 4. まとめ

##### 【瑞巖寺】

- ①本堂の建築にあたり、Ⅰ) 中世の遺構を埋めるとともに、奥側（西側）の丘陵を削って敷地を拡張する→Ⅱ) 基礎整地を行う→Ⅲ) 亀腹を構築する→Ⅳ) 坪地業を行い礎石を据える→Ⅴ) 足場構築→Ⅵ) 足場撤去→Ⅶ) 束石を設置する→Ⅷ) 床を張る→Ⅸ) 新たに土を入れて亀腹全体の整形を行うといった、具体的な工程が明らかになりました。
- ②工程Ⅲ・Ⅵ・Ⅶでは、土の中に板碑や五輪塔が埋め込まれており、瑞巖寺建設に際して、中世の信仰物が抜かれたり壊されたりして転用されたことがわかりました。
- ③本堂の軒先には、凝灰岩を長方形に加工した切石が敷き詰められていました。石敷は南北両側が古く、西側が新しいです。南北の石敷は慶長14年（1609）の瑞巖寺創建時のもので、西側は慶安3年（1650）の屋根葺替え以降、新たに敷かれたと考えられます。東側や御成玄関も石敷があったと考えられますが、明治時代の工事で壊されており、当時の様子はわかりませんでした。

##### 【円福寺】

- ④1号建物跡は、格式が高い四半敷で舗装された基壇を有しており、円福寺の主要建物の一つと考えられます。その南側は丘陵が迫って建物は建てられないこと、北側には、さらに大きな建物が想定されることから、中心建物である仏殿右手に置かれた僧堂と考えられます。僧堂は、僧侶が集団生活を行いながら修行に励んだ場です。
- ⑤1号建物跡は<sup>そうどう</sup>僧堂と考えられること、北側の礎石建物は仏殿もしくは法堂とみられること、宝物館の調査地で確認された直角に折れる区画施設跡は、<sup>かいろう</sup>回廊跡（瑞巖寺2009 -新宝物館建設に伴う発掘調査報告書-）とみられることから、円福寺の主要な建物群（<sup>しちどうがらん</sup>七堂伽藍）は現在の瑞巖寺と同じ位置にあったと考えられます。その場合、伽藍配置は東側（松島湾）を正面とし、山門－<sup>がらんはいち</sup>仏殿－法堂が一直線に並び、仏殿の右手に僧堂、左手に<sup>くり</sup>庫裏があり、山門に接続する回廊が仏殿を囲むという、<sup>けんちようじしき</sup>建長寺式が想定できます。さらに、1号建物跡のあり方から七堂伽藍は基壇を有したと考えられ、こうした様子は14世紀初頭に成立した<sup>ゆぎょうしようにんえんぎえ</sup>「遊行上人縁起絵」に描かれた円福寺の姿に近いといえるでしょう。



「遊行上人縁起絵」に描かれた円福寺（金蓮寺蔵 図録『日本三景展』より）

山門・仏殿・法堂が一直線に並び、仏殿（中心建物）からみて右手に僧堂、左手に庫裏が配置され、山門の両側から延びる回廊は、仏殿を囲んでいます。宝物館の調査で発見されたL字に折れる基壇は、ピンクに塗られた部分に相当するとみられます。

時代	年号(西暦)	出来事
平安時代	天長5年(828) 貞観11年(869)	慈覚大師円仁により天台宗延福寺が創建される 貞観大地震発生。多賀城下まで津波が到達する
鎌倉時代	建長年間(1249~56)	臨済宗円福禅寺が建立される
江戸時代	慶長14年(1609) 慶長16年(1611) 慶安3年(1650) 寛文7年(1667)	伊達政宗が瑞巖寺上棟式(落慶法要)を執り行う 慶長三陸津波発生 本堂の屋根葺替が行われる 本堂の床組が改修される
近・現代	明治28年(1895) 明治29年(1896) 明治33年(1900) 昭和27年(1952) 昭和33年(1958) 昭和48年(1973)	本堂が国宝に指定される 明治三陸地震発生 明治大修理に着手(～明治36年まで) 本堂の屋根が葺き替えられる 本堂の屋根が葺き替えられる 本堂の屋根が葺き替えられる

瑞巖寺関係年表